

教職課程履修者の発音記号に対する認識と定着度

著者	河内山 真理, 有本 純
雑誌名	教育総合研究叢書 = Studies on education
号	12
ページ	89-99
発行年	2019-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1084/00000555/

教職課程履修者の発音記号に対する認識と定着度

Understanding of English Pronunciation Transcription of Students in Teacher-Training Course

河内山 真理* 有本 純**

Mari KOCHIYAMA Jun ARIMOTO

抄 録

本調査は、将来英語教員となる教職課程の学生が、発音記号についてどのように認識し、理解しているのかを調べたものである。調査の結果、発音記号について大学入学以前に体系的に学習したことがない学生が多く、そのためアルファベットと異なる記号になると認識度が落ちることがわかった。その記号を含んだ発音表記を提示されてもどのような英単語かわからない学生が多かった。また、学生にとって、個別の発音よりもプロソディの実現が難しいと認識されていることもわかった。これらの点から、中高に加えて、2020年度からは小学校からの英語教育においても、発音記号や特にプロソディに関わる発音を、体系的に指導していくことが求められる。

I はじめに

1. 発音学習の現状

発音記号は、言語の発音を示すために用いられる音声記号で、日本で教育を受けている場合には、英語の教科書や辞書で見かける記号である。日本では、国際音声学会が定めた国際音声表記 (International Phonetic Alphabet, IPA) を簡略化したものが用いられている。教育現場での発音記号については、現在の学習指導要領および2020年、2021年に実施される小・中・高校の学習指導要領のいずれにおいても、英語の発音記号は、補助的に用いてもよいものとなっている。しかし、実際には発音記号について、学習者が体系的に学習・理解する機会がほぼないことが多くの研究で指摘されてきた (河内山他 2011; 柴田他 2008; 静 2012)。

学習者が発音記号を目にするのは、まずは中学校英語の検定教科書であろう。現行の検定教科書には中学校2年生から新出単語の横に発音記号が記されている。また、中学校の教科書では、発音の仕方や発音記号等について説明する箇所が、単元あるいは巻頭・巻末の付録として記載されている場合もある。このように、各教科書で使用されている記号や、扱いには差がある (小川 2002; 上田・大塚 2011; 2014)。

* 関西国際大学教育学部 教育総合研究所学内研究員

** 関西国際大学教育学部 教育総合研究所学内研究員

英語学習に欠かせない参考書となる辞書にも、発音が載っているが、小中学生を対象とした入門的あるいは基礎的な辞書では、カタカナで表記されている。発音記号が載っているのは中学校から高校以上の中級レベルの辞書となる。また、辞書指導に関する先行研究から、授業で辞書の発音記号などを辞書を使って教えているのは中学校教員で 12.1%、高校で 22.1%というデータもある（寺嶋, 2007）。同調査において、教員が学生時代に受けた辞書指導のうち、発音記号などの音声面の指導は、学校の授業よりも学外でよく行われていたということも明らかになっている。中・高・大学時代は 20%前後なのに対して、学外は 46.7%もあった。これは、学校では発音記号の指導が授業では行われておらず、発音記号を学外すなわち塾や他のところで指導されたことを表している。

中学・高校での指導について、ベネッセ教育総合研究所（2015）において、中学校の現職教員が音読を 88.1%、発音練習を 78.6%がよく行うと答えており、高校では音読 79.8%、発音練習 68.7%となっている。しかし、中高生の 50%が予習復習で本文音読をしていないと回答しており（同, 2014）、発音に関する練習は、授業内に限られていることがわかる。また、音読や発音練習の多くは、一斉音読と新出単語の発音練習であり、発音記号の学習ではないことも寺嶋(2007)などから推測でき、「発音指導」や「音声指導」と分類されている内容の中に、発音記号は含まれていないと考えられる。

教科書の扱いにも差がある上に、実際に教室で発音記号について学習者が学ぶ機会も少ないのでは、将来指導する立場になる教職課程の学生は、実際にどの程度発音記号について学び、その知識は定着しているのだろうか。学習者自身の認識と、実際は合致しているのだろうか。本研究ではこれらの点を明らかにするために調査を行った。

II 調査

1. 調査の目的と対象

将来、英語教員を目指す教職課程履修中の大学生を対象に、発音記号の学習歴や理解度を明らかにするためにアンケート調査を行った。質問項目には、学習歴、発音記号への理解、発音記号をどう認識しているか知るために、発音記号から英単語を答えるものも含めている。回答者は、中高の英語教員を目指して教職課程を履修している関西にある 2 私立大学の大学生 1~4 年生 42 名である。

2. 結果

2.1 入学前の学習歴

図 1 は大学入学前の発音記号の学習歴をまとめたもので、回答者の 53%は、大学入学前に英語の発音記号を学習したことがなく、一通り学習したという者は 8%、断片的に学習した者が 26%であった。また、学校ではなく、塾や家庭教師など学校外で学習した者もわずかだがいた。

回答者の半数以上が発音記号を学習したことがなく、あったとしても部分的にしか学んでいないことがわかった。(図 1)

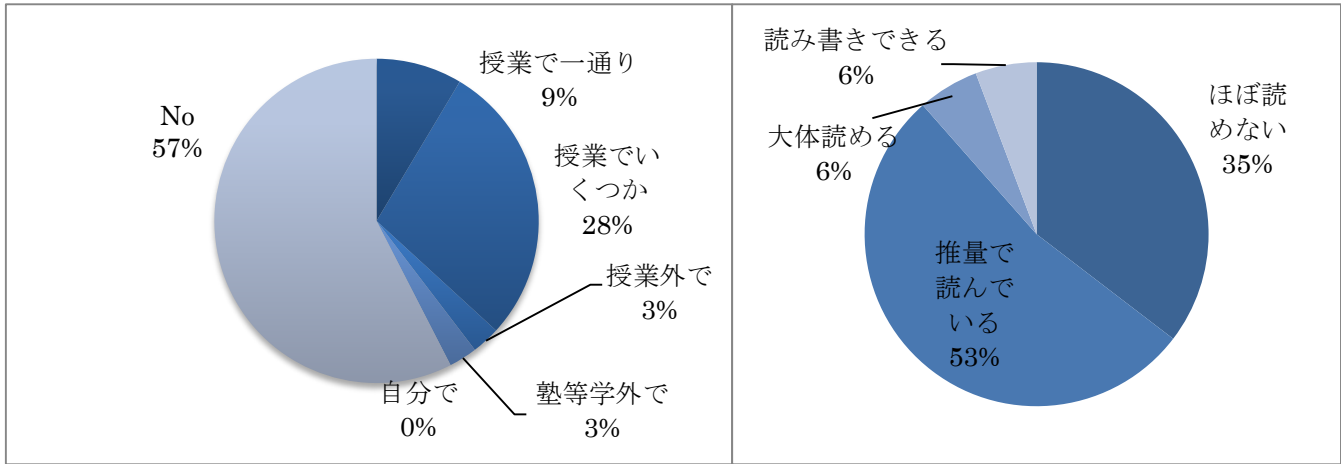


図1. 大学入学前の発音記号の学習歴

図2. 発音記号を読める率

次に、発音記号を読むことができるかという質問に対し、学習歴がある場合でも、読めると回答した者は1割程度、残りはほぼ読めないと回答している。(図2)

発音記号については、大学入学前に学習していることは少なく、学習したとしても実際に発音記号を読んで理解できるレベルにはほぼ到達していないということが回答から判断できる。

2.2 発音記号の認識

実際に用いられている発音記号をどの程度認識できるのかを知るため、それぞれの発音記号について、読めるか否かを尋ねた。読めない記号として、*/ɛlʒ/*が最多で86%が読めないと回答した。次いで*/ð/*が83%、*/tʃ/*が81%、*/ə/**/dz/*が79%、*/ɔ/**/dʒ/**/ŋ/*が76%、74%が*/ə/*であった(図3)。共通する特徴として、アルファベットと異なる記号が、「読めない」と認識されている。

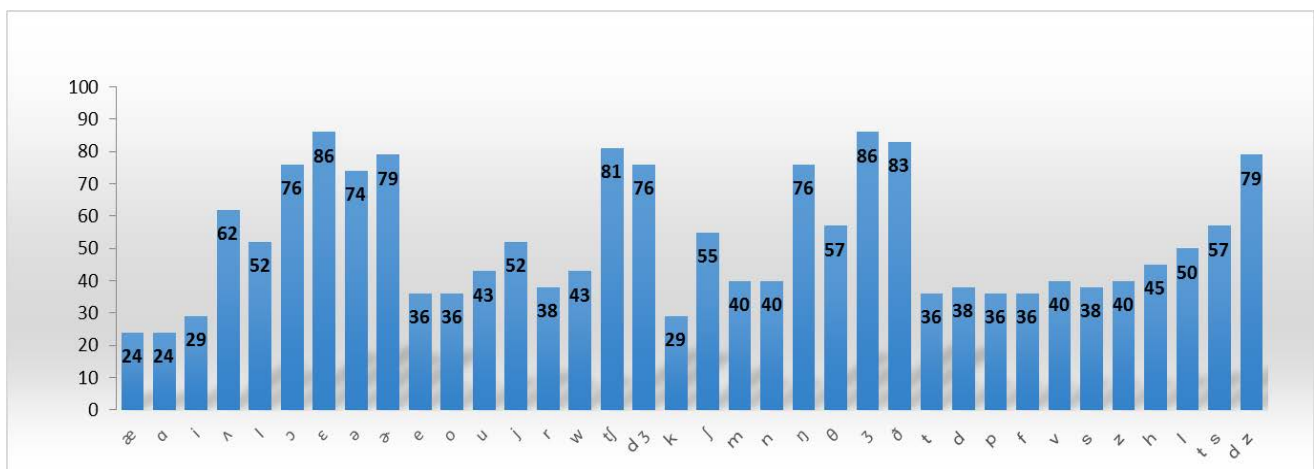


図3. 読めない発音記号(%)



図4. 発音記号を知り、かつ音も知っているという割合

発音記号を知っているという者が、実際にその記号が示す発音を知っているかを確認するために、「記号を見知っており、かつその記号が示す音を知っているか」と尋ねたところ、図4のような結果となった。図3にあったように、アルファベットとして馴染みのある記号でないものは認識率が落ちる。記号を見かけたことがあっても、その発音を正しく知っているかに自信がないため「発音はわからない」と回答していると考えられる。特に母音には、アルファベットとは異なる記号が用いられている /ʌ/ /ɜ/ /ø/ /ɛ/ 等が「わからない」代表である。一方で、/æ/ は、アルファベットで用い

記

号子音では、/ʒ/ /ð/ /dz/ /j/ /θ/ /dʒ/ /tʃ/ /ɨ/ が、読めないという回答率が高かったが、このうち、特殊な例を挙げて /j/ が挙げられる。これは文字としては馴染みがあるが、発音記号として用いられるときに異なる音価を示す。具体的には yes の語頭の音を示すのに用いられているが、よく知っている単語にもかかわらず発音記号の /jes/ または /jes/ で示されると /j/ が何かわからず発音できない。

が

2.3 発音の調べ方

目英単語の発音がわからないときの対処方法については、電子辞書の音声で確認するのが45%、綴りから類推して読むのが13%、辞書の発音記号を確認するのが16%、友人など人に尋ねるのも21%であった。

図2の回答と比べると、「読める」学生は12%にすぎないことから、読めないと回答している類あるいは推量で読んでいる学生の中にも辞書の発音記号を確認する場合もあると考えられる。

度

が

高

く

、

中

学

校

か

ら

ら

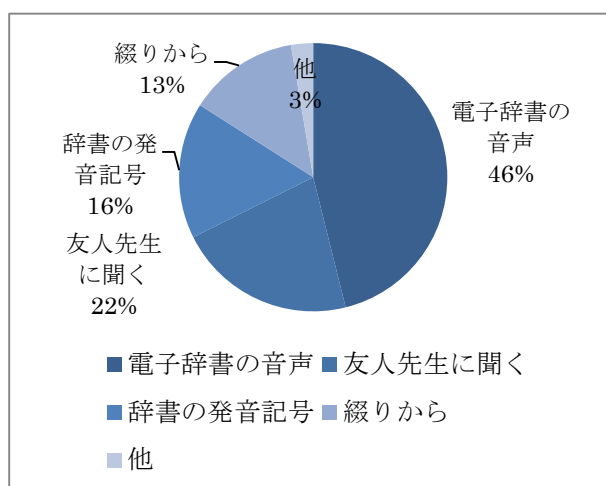


図5 発音がわからないときの対処法

2.4 発音記号の理解度

実際に、どの程度発音記号が読めるのか確認するため、発音記号からその表す英単語を答える問題を課したところ、単語を適切に読み取ることはできない場合が多く、正答率は多くても3割であった。表1からわかるように、不正解よりも、解答そのものを断念する「無回答」が圧倒的に多く、見慣れない記号を見つけた時点で読むことをあきらめたものと考えられる。

中学校までで学ぶ使用頻度の高い語彙であっても、発音記号だけで表示されると、英単語と結びつけることができていると言えない。特に前述した‘yes’など、意味も綴りもよく知っており、綴りも発音記号も3文字で表示される短い単語であるが、/j/と/ε/という不慣れな記号2文字を占めているために、94%が解答を放棄している。本調査では、特に見慣れない発音記号を含む単語を意図的に尋ねているが、そのような記号を含まない場合は、もっと無回答率が下がって正答率が上がったと考えられる。ただし、本調査では、英単語の綴りを書かせるという手法を取ったため、発音できたかもしれないが綴りを間違ったために不正解となった可能性は否めない。

表1 発音記号から英単語が導き出せるか

発音記号	/bɔ:l/	/lɑ:rdʒ/	/sɪŋk/	/mætʃ/	/jes/
正解	ball	large	sink	match	yes
正解率(%)	12	29	29	24	6
不正解率(%)	23	12	18	0	0
無回答率(%)	65	59	53	76	94
誤答例	howl, bcll	larde	think	—	—

2.5 学習者にとって難しい発音

学習者が困難だと感じる英語の発音項目では、強弱のリズム68%、文脈に応じたイントネーション61%、/r-/l/の区別50%、/si-/ʃi/の区別を45%が選んでいた(図6)。個別の発音よりも、プロソデ

ィに関する項目の方が困難を感じていることが判明した。

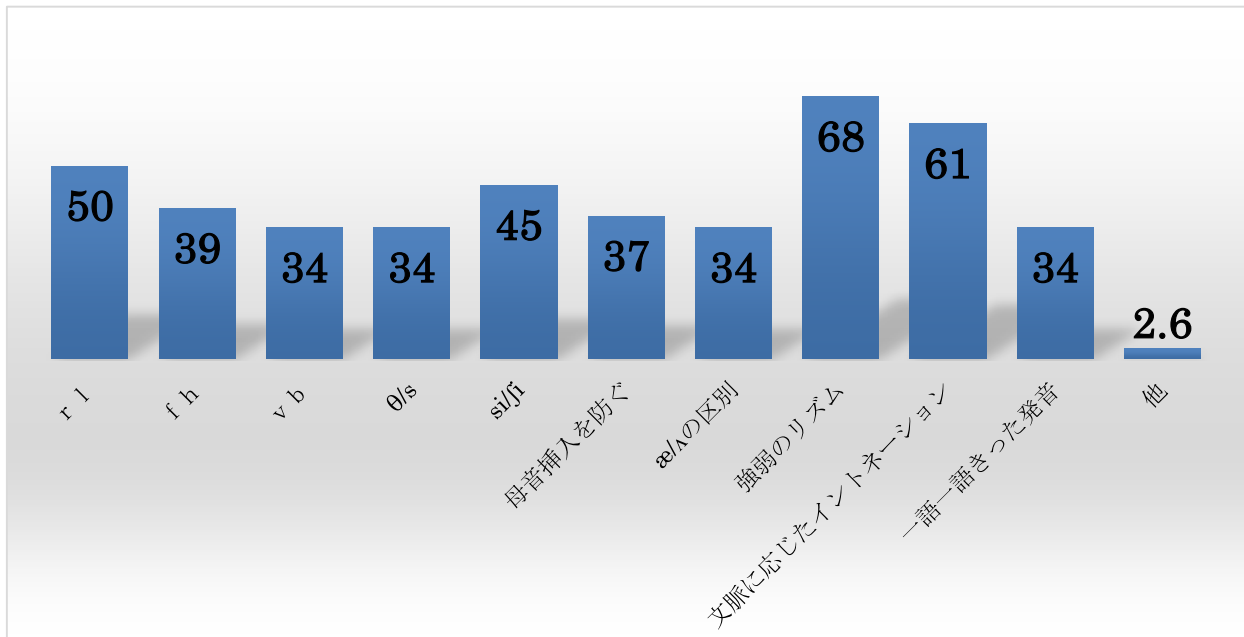


図6 発音に困難を感じる項目(複数回答可, %)

III 考察

1. 発音記号の学習

調査の結果から、発音記号についての学習が中学校・高校ではほとんど行われていないこと、行われていても部分的で、体系的ではないことが判明した。アルファベットと同じ記号を用いている場合は「読める」と認識しているが、アルファベットとは異なる記号の場合は「わからない」と認識している。アルファベットは、英語の文字として馴染みがあり、正しく読めるかは別として「知っていて読める」と認識していたり、綴りから推量で読んでいる者も多いため、「読める」と認識しているのではないかと考えられる。実際に、学習者は綴りにつられて「ローマ字読み」している場合も授業ではよく見かけられる。

発音記号を英単語に直す問いから、学習者自身が知っているとは認識していても、実は正しく理解できていなかったり、知識として定着しておらず、使えるつもり、知っているつもりという状態であることが判明した。原因としては学習時間の影響、体系的に指導されていないために断片的にしか覚えていないことなどが考えられる。

英語教員としては、発音記号の知識を持っておかねばならないが、現状では、その不足分を大学で行わなければならないこともわかった。特に、見慣れない記号や紛らわしい音については、正しい調音方法と共に身につけておかねば、教員として指導することはできなくなる。不足している発音記号の学習について、どの程度の知識が必要となるかについては、後述する。

2. プロソディ

学習者は、英語らしいプロソディの実現が難しいと考えていることもわかった。中学・高校までの授業では新出単語の発音やストレスの位置は注意されても、斉読などで、イントネーションやリズムにまで注意して読ませる音読指導は、時間的な制約等からあまり実施されず、モデルの音声をリピートするだけに留まっている場合が多いと推測される。

困難を感じる項目として、1番目に上がっているリズムについては、リズムよく発音するために必要となる音変化、特に連結については中学校用の教科書や、その教授用資料で解説が載っていることが多いので、音変化のことは知っていても、それを活かしてリズムよく読む練習まではされていないと考えられる。特に母語の日本語がすべて「強く」発音される言語で、リズム体系も英語の強勢拍リズムと異なっているので、実感を持って理解し、練習できるほどの時間が、中学や高校での授業では十分に確保できていない。

困難を感じる2番目に上がったイントネーションについては、中学校で文末の上げ下げについては指導されている。しかし、イントネーションを示す決まった記号がなく、教科書、参考書などで様々に異なった方法で示されている。斜めの矢印や、カーブした矢印が文末に付けられていることもあれば、文全体に線が引いてあり、イントネーションの変化を線で示している場合もある(表2, 図7)。この線も、直線のみで示されていたり、曲線が入ったりと統一されていない。学習者が通常目にする検定教科書には、線は引かれておらず、教科書準拠の参考書などで、音声のヒントとして様々に示されている(河内山他, 2018)。

表2. 中学校検定教科書の教授用資料で用いられている音声情報とその記号

出版社	NH	NC	S	TE	OE	C
イントネーション	文全体 全文 ↗↘	文末・句末; 重要箇所 ↗↘	文末・句末 全文 ↗↘	—	—	文末・句末 ;重要箇所 ↗↘
連結	—	∪	∪	∪	∪	∪
文強勢	イントネーションで 表示	2段階 'と'	2段階 'と'	2段階円 ・楕円	1段階 ˊ	1段階 ▼
ポーズ	— (イントネーションか ら類推可)	/と//		/	—	—

河内山他 2018 より抜粋

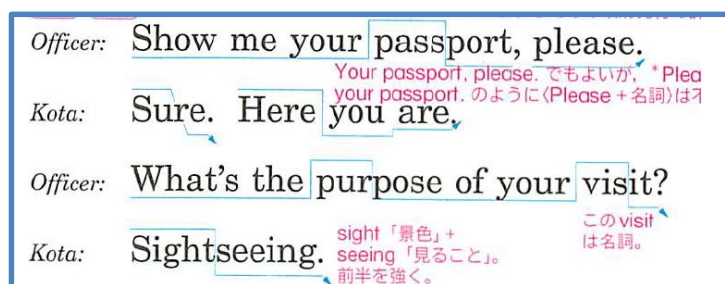


図7 イントネーションを示す実例 (New Horizon English Course 2 Teacher's Book)

学習者は、中学校で、平叙文は文末を下げ、疑問詞疑問文は上げて発音するということを学んでいる。しかし、実際には、モデル音声に続いて読む練習がほとんどで、リズム維持のための音変化の重要性は理解できておらず、音読時にも意識できていないと考えられる。イントネーションの上昇や下降について基本を学んでいるものの、大学生でも「疑問文」は文末のイントネーションを上げると間違っていて覚えているために、疑問符がついていると上げて読んでいる例は多々見られる。この他に、近年多くなっているのが、「下がる」イントネーションのところで十分に下がらないうというパターンである。これは母語の影響が大きいと考えられる。母語の日本語でさえも、文末が下がりきらないイントネーションでの発言は若年者に多くなっている。母語でさえ「棒読み」のようになって抑揚が付けられないのに、外国語である英語で抑揚を付けて読むのはさらに困難であろう。

3. 改善のために

調査結果から、発音記号の理解度を高めるために中学校から大学までに、以下のような取り組みを推奨する。

①発音記号の体系的指導

すべて事細かに指導する時間はないとしても、優先順位を付けて指導していくべきである。特にアルファベットと異なる記号、アルファベットを用いながらそれとは音価が異なる記号が最優先である。次に、日本語にはない音価を持つ記号、区別が必要な記号の発音指導が求められる。その他はアルファベットやローマ字読みで見当がつくため、時間があれば指導する。

②発音方法と矯正の指導

日本語にない音は、特に調音法を学んでおかないと発音できない。正しい発音の仕方と発音記号を結びつけて理解しておくことは、辞書を引いて語の発音を確認できるようになるという点で、自立学習でも重要である。電子辞書の「音声」ボタンは、参考にはなるが、実際に音声を聞いてもどう発音するかがわからないこともあるので、教室での教員による直接指導は欠かせない。また、一度、発音記号を音声化する指導を行っても、通じる発音ができるとは限らない。その対処法として、円滑なコミュニケーションが行えるレベルの発音に矯正する指導が中学校後半以降は必要であろう。

③イントネーションの指導

基本パターンで抑揚の付け方を、1 語文で例示し、その意味の違いと共に実感させる。その後、音読時に求められるイントネーションに注意させて学習者に実現させる。

④リズム

チャンツなどを使用し、リズム良く読む練習をする。チャンツは小学校英語で頻繁に使われており生徒も馴染みがあるため、中学校以降も継続する。チャンツ練習の意義を伝えておくと、中等・高等教育では練習の動機を高めることができる。

⑤音声変化

音声変化や弱形の練習は、「発信」するときには実現できなくても問題ないが、「受信」の場合に、聞き取れないと問題が生じることがある。学習者自身が音変化や弱形の発音を知り、口に出して試みることで理解を深め、特にリスニング能力に正の転移を起こす。ただし、学習者のレベルに応じて指導することが必須である。

IV おわりに

発音記号は、英語学習で特に自立学習には役立つと考えられるが、現在の教育課程の中では十分に指導されておらず、教職課程の大学生でも理解できていない場合が多い。電子辞書が普及し、音声機能による確認ができて、格納されている音声は1種しかなく、多くは米音である。英語は多くの変異種を持っており、TOEIC®でも取り入られている。弱化などを耳で判断することは難しいが、発音記号を見ると一目瞭然である。必要最低限度の学習時間と内容を確保することが今後の英語学習に求められる。

本研究では、ごく限られた人数の調査ではあるが、学習が不十分であることが判明している。今後の研究課題として、現職教員が「発音練習」だと考えている新出単語の練習に発音記号を取り入れる具体的なプログラムや、指導方法を検討する予定である。

*本稿は、2018年8月に開かれた全国英語教育学会京都研究大会（龍谷大学）で発表した内容を加筆・修正したものである。また、本研究は、科学研究費助成事業（基盤C16K02869）の助成を受けている。

参考文献

ベネッセ教育総合研究所 (2014) 「中高生の英語学習に関する実態調査 2014」

<https://berd.benesse.jp/global/research/detail1.php?id=4356>

ベネッセ教育総合研究所 (2015) 「中高の英語指導に関する実態調査 2015」

<https://berd.benesse.jp/global/research/detail1.php?id=4776>

河内山真理・山本誠子・中西のりこ・有本純・山本勝巳 (2011) 「小中学校教員の発音指導に対する

- 意識—アンケート調査による考察—』『外国語教育メディア学会関西支部研究集録』(13), 57-78
- 河内山真理・有本純 (2018) 「中学校英語教授用資料における発音表記の実態調査」『関西国際大学教育総合研究叢書』(11), 57-65.
- 小川直義 (2002). 「教育的発音表記について」『英語音声学』(5), 389-403
- 柴田雄介・横山志保・多良静也 (2008). 「音声指導に関する教員の実態調査」『四英語教育学会紀要』28, 49-55.
- 静哲人 (2012) 「「教職入門」および「英語科教育法」の受講効果の検証—発音指導と英語教師に関するピリーフの変化を追う—」『埼玉大学紀要』, 61(1), 41-56.
- 寺嶋健史(2007)「現職英語教員の学生時代の辞書使用に関する一考察」『言語文化研究』27(1), 45-60.
- 上田洋子・大塚朝美 (2011). 「発音と音声のしくみに焦点をあてた中学校英語教科書分析—インプットの基礎を考察する—」『大阪女学院大学紀要』7, 15-32.
- 上田洋子・大塚朝美 (2014). 「中学校検定教科書における音声指導項目の分析—新学習指導要領での扱いの変化について—」『大阪女学院大学紀要』10, 1-15.

Abstract

Phonetic Alphabets show how to pronounce a word and learners easily realize the sounds of the word by these phonetic alphabets. This is one of the necessary knowledge for English teachers. This paper examined whether students in teacher training course understand phonetic alphabets. As a result, it is not systematically taught or partly taught before entering university and only 12% students can read phonetic alphabets. Most of them cannot identify English words shown in phonetic alphabets even if they are very familiar words. Students have difficulty to understand the symbols different from English alphabets. They also feel difficulty to realize English prosody. Both are caused by the lack of opportunity to learn them before entering universities. Knowledge of phonetic alphabets and prosody should be added in teacher training course and some plans are shown in this paper.